



Title	「さすらいあるき」の道：身体的空間としての道
Author(s)	加藤, 淳子
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 107-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53166
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「さすらいあるき」の道

加藤淳子

現在、都市の道路の多くは自動車交通を優先的に計画改造され、人間が「あるく」ということについてはほとんど考慮されていないのが実状である。人は排気ガスを吸わされながら、特にわが国では、狭い歩道上を電柱や張り出した看板などに気遣いながら歩かなければならない。そして側を走る自動車を横目にいらいらと目的地へと急ぐのみである。たとえ人が歩く道や通路が計画されても、主題はいつも自動車からの安全性の確保と、人の流れをいかにスムーズに導くかということであり、「あるく」ことを楽しめるような道ではないし、われわれも都市の中では歩く楽しみなど忘れてきているか、考えもしなくなっている。そこで、この「あるく」ということ、特に「さすらいあるく」という面から「道」について考えてみた。そうすることで、現在の都市化、情報化社会の中で疑似体験ばかりが増大し、人や物との具体的な接触感などわれわれが失いかけているものを取り戻すきっかけにならないかと思えるからである。

まず「あるく」ことは心臓病、その他の成人病などの予防といった身体な面だけでなく、単純な運動の繰り返しがストレスの回避など、心理的な面でも効果的であるとされる。そして、それ以上の意味が、「あるく」という体験のなかにあるのではないかと考える。一歩一歩足を踏み出すたびに足だけではない全身の筋肉の感覚、ゆっくりなのか足速であるかの違い、あるいは坂

道を上るのか下るのか、道路のテクスチャによる足の裏の感触、ときに靴音のリズム、空気の流れ、周囲の匂いや音の変化、そして時間的経過の中で変化する視覚世界、それら一切が渾然一体となって全身的に受け止められる。しかも、「あるき」ながらとらえられる視覚世界は、ただパースペクティブなものとして目の前に広がっているのではなく、歩を進めるたびに最初側面しか見えなかったものが次第にその正面を現わしてき、今まで前方にあったものが背後に消えて、すなわち、未知なる「あそこ」が既知なる「ここ」になり、しかも絶えず関心は移り、世界は構成し直される。それはまた単に対象として目の前にあるのではなく、同時にわれわれもまた回りの風景に捉えられているという関係にある。まさにこうした空間体験について、J.J. ルソーは「孤独な散歩者の夢想」の中で述べている。「快く深い夢想がそのとき彼の官能をとらえ、彼は甘美な陶酔を感じて、その広大な美しい体系の中に消え失せ、それに同化した自分を感じる。そのとき個別的な対象はすべて彼の視界を去って、彼はすべてを全体のうちに見、また感じる」と。

しかしながら、われわれは日常的には絶えず前方へと忙しく駆り立てられていて、そういう瞬間を持ちにくい状況にある。とくに路上にあっては、人間は常に到達すべき目標に向かわなければならない。出発点と目的地、言い換えれば過去とこれから突き進んで行くべき道がどこであるか問われ

続けている。そして、時にそうした緊張感から解き放たれたい、すなわち目的や時間を欠いた状態に身を置きたいという欲求が生じる。つまり、ボルノウのいう「さすらいあるく」ことを望む。「さすらいあるく」とは、日常的に買い物や通勤といったある明確な目的があって歩くのではなく、気晴らしの散歩、散策、散歩、ぶらつきなどを含み、自己目的として「あるく」。そして「さすらいあるくことは、人間が、人間の現存在の目的へのあまりにも大きくなった執着から脱出しようと試みる形式なのである」ともいう。

旅はそうした「さすらいあるき」の究極的な形であるだろうが、都市生活を余儀なくさせられているわれわれが、日常的に「さすらいあるき」を試みようとするとき、どんな道を選ぶだろうか。例えば、観光者としてではあるが、パリのブルヴァールを歩くよりもイタリアの山岳都市の曲がりくねった狭い道をゆくほうが「あるく」楽しさは大きいということがある。そこでは、ヒューマンスケールに応じた道路の幅と建物がわれわれを包み込み、「迷路」のような曲がりくねりに身をまかせているうちに視覚的、論理的に街を対象化して眺めるのではなく、全身的感觉で受け止めながらその街の空間に「分け入る」ことができる。また、平坦であるより坂や階段のある道の魅力については、B. ルドルフスキーが述べているとおりであり、その言葉を借りれば「あるくと言う言葉が『にぶい』『のろい』といったことばと同義語であって…アスファルトにぴったりの工業時代の偏平足の人間は階段といえば嫌って攻撃するのだ。…再び歩くことの楽しさを学び取りさえず

れば、階段は人々の生活の中で最も正当な地位を勝ち取ることになるう」と。そこでは上昇と下降の持っている人間にとって抗いがたい魅力もある。

このように、「さすらいあるき」たい道は決して効率の良い、滑らかで何の抵抗感もない道ではない。また、一時的な「歩行者天国」や、観光客に媚びて小細工された道などでもない。むしろ裏道や路地道が「あるく」ための道として整えられるべきであるし、その際の整備の在り方も考えられなければならない。地下道や歩道橋も単に安全性のみではなく上り下りへと誘うような計画ができないものだろうか。特に都市での「さすらいあるき」の道は、ことさら出かけなくともむしろ何かのついでに、あるいはある目的を果たした後の緊張感から解放されてふらりといつもの道から逸れることでも成り立つ。それは日常の生活空間としてある道の中から、その日その時の気紛れで、様々な色の様々な紡ぎ糸、すなわち「太い」のも「細くよじれて」いたり「縫れ」そうなのも、魅力ある線の要素が様々あって、ある距離を連続して繋いでゆけるかどうかである。つまり、日常空間の中に非日常空間を求めて、半ば「遊び」として、道に「紛れ」「迷い」「逸れたり」「滲み出したり」して「あるく」。そして、その都市が魅力的であるかどうかは、そのようなわれわれの「気まぐれ」をいかに受け止められる余裕や選択肢を持つかにあるともいえよう。

(かとう・じゅんこ 成安女子短期大学)